

連載 (供覧) いはひまつりのみち

宗教は人を殺し、祭祀は人を生かす
世界平和のための祭祀を復興させる

第一回 祭祀の定義

南出喜久治（令和6年9月1日記す）

ちちははと とほつおやから すみめおや やほよろづへの くにからのみち
（父母と遠つ祖先から皇御祖八百万神への国幹の道）

皆さんは、「さいし」と聞くと、何を思ひますか。

いまや、「さいし」と聞いても「妻子」とか「才子」としか思ひ浮かばない人がほとんどだと思ひます。「祭司」のことかといふ人も居ると思ひますが、漢字語の音の「さいし」にはいろいろあるのに無理ありません。

そこで、ここでは、やまとことのは（大和言葉）の「いはひまつり」のことを「祭祀（さいし）」といふ漢字語として便宜的に置き換へて表現することにします。

ところで、祭祀と聞けば、考古学で語られる祭祀の遺跡とか祭具といふ「物」を連想する人は居ても、祭祀といふ「営み」を連想する人は少ないのではないかと思います。

考古学といふのは、当時の衣食住を支へる実用的な生活に使はれた物ではないと想像するものについて、それを祭祀の遺跡であるとか、祭祀に用ゐた祭具であると推測するだけで、その祭祀がどのようなものであつたかを考察することはありません。

つまり、「モノ」だけに限定した学問ですから、唯物論の学問なのです。

世の中に存在するものの分類として、「モノ」と「コト」の区別があります。

モノは、五感の作用によつて認識できるものであり、コトは、それ以外のものです。

このやうに分類すると、祭祀は、「モノ」を用ゐた「コト」なのです。

祭祀とは、祖先祭祀、自然祭祀、英霊祭祀の総体のことですが、これらを齎行する祭事自体はモノですが、祭祀そのものは、それから観念しうるコトなのです。

いま、世界における信仰は、「宗教」のみであると思つてゐる人が多く、信仰には、「祭祀」が人類の原点であることの自覚に乏しいのが現状です。

信仰世界には、「祭祀」と「宗教」とがあり、両者の理念と構造は、全く異なつてゐるのです。

信仰には、祭祀と宗教といふ全く異質な二つがあることを自覚してください。祭祀も宗教も同じやうなものであるとか、両者を混同して用ゐてゐる例が多く、概念的な区別が明確ではありません。

広辞苑によると、祭祀とは、「神や祖先をまつること。」とあり、大辞泉と明鏡国語辞典でも、「神や祖先を祭ること。」とあります。

これに対し、宗教については、広辞苑では、「神または何らかの超越的な絶対者、あるいは卑俗なものから分離され禁忌された神聖なものに関する信仰、行事、制度。また、それらの体系。」とあり、大辞泉では、「神・仏など超越的存在や、聖なるものにかかわる人間営み。」とし、明鏡国語辞典では、「神や仏など人間の力を超える絶対的なものの存在を信じ、それを信仰すること。また、そのための教義や制度の体系。」とあります。

これらによると、まづ、祭祀は「まつること」といふ外面的行為とし、宗教は「信仰すること」といふ内面的行為としてゐるやうですが、祭祀の内面的行為を無視してゐることから、これでは定義になつてゐません。

祭祀とは、人が祖先と自然と英霊といふ生活と具体的な関係性のあるものへの畏敬と感謝の念から生まれる信仰であるのに対し、宗教とは、人の理性の働きによつて観念的に想像された超越的、絶対的なものに対する信仰であると定義されるものです。

つまり、祭祀は具体的なものに対する信仰、宗教は抽象的なものに対する信仰といふことなのです。